

# アンデルセン作品の再話について



並 河 信 子

## 問題

今回はアンデルセンの作品が、わが国で現在いかに再話されているかについて、若干の考察を試みた。彼の作品がわが国でどのように普及してきたかを見ると、最初に紹介されたのは、『明治文化資料叢書』『翻訳文学』などによれば、明治二年（一八八八年）河野政喜による「王様の新衣裳」であろう。著者は作品のあとがきに「右はデンマルク人アンデルセンの奇談集の一話なるが、未だ原書を見ざるによりて、姑らく仏蘭士人ソルデ氏の訳本より翻訳したり……」と記している。以来現在まで単行本のみで約三百種の出版がなされてきたといわれる。菅忠道は『児童文学入門』（坪田譲治編）の「日本の児童文学」において、昭和初年の児童文学の暗黒時代も「……グリム、アンデルセンなどの粗雑

な再話を主とする赤本的な童話だけが販路を持てた」と、さらに創作童話の主流は、生活童話になり、空想的な物語性のあるものが、影をひそめることになったが、「それなのに、アンデルセンやグリムは、戦前・戦後を通じて、あいかかわらずさかんであった」と述べ「日本の児童文学の伝統は、アンデルセン的なもの流れを強く受けている」ことを指摘している。この原因については多様に考えられようが、大畑末吉が『アンデルセン童話全集』の「解説」で考察しているごとく、森鷗外の『即興詩人』の文壇での評価が、アンデルセン童話の価値をたかめたこと、わが国の児童文学史上、一つのエポックを画した『赤い鳥』誌上に鈴木三重吉によるアンデルセン作品が記載され、さらにその紙上には、小川未明らアンデルセンの影響をうけたと思われる作品も少なくない。なお明治・大正の訳者たちに児童文学畑でない人たち

が多かったこともアンデルセンの読者層を拡大と考えられると  
している。

さらに彼の作品そのものにも、わが国で普及した原因があると思  
うが、この点に関しては、今後の課題としたい。

つぎに、わが国における児童文学の問題点として、芸術的文学  
とでも呼ぶべき派と、大衆的な児童文学とが分離していることに  
ついて述べる。これに関して、菅忠道は『日本の児童文学』鳥越  
信は『日本児童文学案内』、上笹一郎らは『児童文学への招待』  
において、それぞれ考察をなしている。上笹一郎は一般に児童文  
学の作品をはかる基準は、「芸術的にどれほどすぐれているか、教育上  
どのような意味を持つか、そして子どもにとってどれほどおもしろ  
いか」との三項目にしばられるとし、ヨーロッパ諸国の代表的  
児童文学作品は、これらの融合が典型的な形で実現されているが、  
わが国ではこれら三要素をみごとに統一してみせた作品のないこ  
とを記している。『児童文学論』<sup>⑥</sup>において、リアン・スミスは「そ  
れぞれの時代の子どもの本に、その時代のもっとも悪い特徴が  
強くでていたことがわかる」と述べている。前述の如く、特に多  
く出版されてきたアンデルセンの作品が、問題のあるわが国の  
児童文学の中で、どのような働きをしてきたのか、現在どのような  
状態なのであろうか。これらを考察することによって、わが国の  
児童文学の問題検討のための資料に供すること

とはできないであろうか。

さらに読者の年齢層を考慮した再話について述べる。鳥越信は  
児童文学発生の要素として、教育制度の確立・普及を最大のもの  
としてあげ、具体的な形の上では、伝承説話の再話から児童文学  
の歴史が始まったことは、世界各国共通した形であることをあげて  
いる。なお個々の再話の問題についても、<sup>⑦</sup>リアン・スミスはギ  
リシャ神話の再話に関して、西郷竹彦はその著『子どもの本』の  
中で長篇物語詞「せむしの小馬」について、波多野完治は氏の訳  
書であるヴェルヌの『十五少年漂流記』のあとがきで、それぞれ  
特色ある考察をなしている。アンデルセンの作品は多様に再話さ  
れているが、それが実際にどのようなかを追求した研究は少  
ない。しかし『絵本と子ども』<sup>⑧</sup>において、松居直は「親指姫」の  
絵本六点を分析し、文字の多いものさえ原作訳の1/2に短縮して  
あること、全体の統一や変化はどれも満足できない、外国のそれ  
に比して劣るなど多くの興味ある問題を指摘している。

つぎに幼年童話について述べる。与田準一は前述の『児童文学  
入門』の「幼年童話論」において、幼年童話の対象読者（聞き手  
も、ふくめて）を、幼児から小学校中級くらいまでとしている。  
さらに幼年童話という語は昭和初年に見られ、慣例的になり、今  
日におよんでいる不熟な語である、などの意見を述べている。一  
般にこの用語は、図書誌上の学年指定などに多く用いられ、読書

指導書、言語指導書などには見あたらぬように思う。アンデルセンの作品も、幼年童話として多く出版されているが、実際にどのような再話がなされているのであろうか。今回は絵本・幼年童話に類するものを中心に、アンデルセン作品の再話に関して、考察を試みることにした。

## 方法

歴史的考察には資料不足のため、今回はアンデルセン作品のうち、現在入手できると考えられるものを対象とした。即ち、一九六五年十二月十七日より、一九六六年三月十七日まで、三ヶ月間に入手した、児童を対象としたもの一六冊を調査資料とした。<sup>⑩</sup>無着成恭も『子どもの本二〇選』において、児童図書の買にくいことを書いているが、この一六冊の中には、店頭にはあるが出版社にはすでにないものもあり、出版されているのに入ってきたなかったものもあるのではないかと思う。

これらを日本十進分類法(NDC)で分類した<sup>⑪</sup>『日本総合図書目録児童書編一九六六年』に照合した。即ち、(一)幼児および小学校初級(絵本を含む)(二)小学校中級(三)小学校上級および中学生の三段階に分類した。目録に記載されていないものが、一六冊のうち十五冊あったが、これらも上述の分類に準じた。この分類を中心に、シリーズの構成・書名・一冊内の作品数・再話と訳本と

の関係などを数的に検討した。

次に大畑末吉訳『アンデルセン童話集』および、大畑・林・平林・矢崎・山室編<sup>⑫</sup>『アンデルセン童話全集』を原作訳として、再話との比較を試みた。単に再話との比較といっても、多くの考察方法があげられると思うが、今回は採用の多かった「親指姫」<sup>⑬</sup>、「みにくいアヒルの子」「マッチウリの少女」「皇帝の新しい着物」<sup>⑭</sup>「しっかり者の錫の兵隊」に関して、ストーリーの問題を中心に考察した。

## 結果とその考察

方法で述べたごとく、<sup>⑮</sup>『日本総合図書目録児童書編』に照合して

表1 調査資料(文学と伝記)

	幼・小初		小中	小中 上 学	計
	絵本	童話			
冊数	26	49	38	3	116
(%)	(22)	(42)	(33)	(3)	(100)

表2 文学と伝記

	幼・小初		小中	小中 上 学	計
	絵本	童話			
文学	26	46	32	2	106
伝記	0	3	6	1	10

分類したが、これらの分類そのものに検討すべき難問があると思う。しかし今回は一応これに準じ、アンデルセンの作品を量的に検討したものが、表1より表8までである。調査の対象となった資料

表 3 シリーズ内の冊数 (文学)

	幼・小初		小中	小中 小学	計
	絵本	童話			
全 冊	6	4	17	0	27
一 冊	5	11	11	2	29
二冊以上	15	31	4	0	50

表 4 1冊内の作品数 (文学)

	幼・小初		小中	小中 小学	計
	絵本	童話			
1 作品	22	9	1	1	33
2 ~ 15	4	36	19	0	59
16 以上	0	1	12	1	14

と  
思  
う。  
さ  
ら  
に  
こ  
れ  
ら  
を  
文  
学  
作  
品  
と  
伝  
記  
と  
に  
分  
け  
る  
と、  
表  
2  
の  
ご  
と  
く、  
伝  
記  
は  
他  
学  
年  
に  
比  
し、  
幼  
年  
期  
に  
少  
な

を、方法を述べたごとく分類したものが表1である。絵本と幼年期に分類されるものを、他学年と比較すると、表に示された如く、全体的に数量が多い。即ち現在出版されているものの、六四％は絵本と、いわゆる幼年向き童話といえよう。しかし、絵本と命名し、絵本の分類に入っているものを絵本とし、他を童話としたが、童話の中にも絵童話と称するものもあり、絵本、絵童話・絵の多い童話などの区別は、困難な問題と思う。現在手許に十数冊、英文のアンデルセン作品に関する童話集があるが、何れも幼児向きのものは少なく、良書の紹介書にも、幼年期のものは少なく思う。資料が僅少なため断言できぬが、もしアンデルセン作品が幼年期用に多く紹介されているのがわが国の特色とすれば、興味ある問題

表 5 書名 (作者名: 作品名) (文学)

	幼・小初		小中	小中 小学	計
	絵本	童話			
作者名	3	17	18	1	39
作品名	23	29	14	1	67

表 6 書名が作品名のもの(1~5)(文学)

	幼・小初		小中	小中 小学	計
	絵本	童話			
マッチウリの少女	2	7	2	0	11
親指姫	5	3	1	0	9
人魚姫	3	3	2	0	8
みにくいアヒルの子	5	1	0	0	6
野の白鳥	1	3	1	0	5

い。絵本の中には、紙面七頁を使用して、「あんでるせんものたり」という題で小品の伝記を含んだものが一冊あった。以下の表は伝記十冊を除いた、いわゆる文学作品を対象とした。アンデルセン作品は、ほとんど何らかの形のシリーズに属している。その構成を、全冊アンデルセン作品で占められているもの、一冊のみ、および二冊以上に分類すると、表3の如く、幼年童話では特に後者が多い。即ち、二十冊、五十冊などでシリーズが構成されているものうち、書名が作者名のもものが一冊、作品名のもものが一、二冊ずつ含まれている場合が多い。全冊アンデルセンで構成されているシリーズの数は、四一十であり、冊数はそれほど多くない。

表7 再話と翻訳(文学)

	幼・小初		小中	小中 小学	計
	絵本	童話			
再話	26	46	15	1	99
翻訳	0	0	17	1	18

表8 多く採用された作品(1~5)(文学)

	幼・小初		小中	小中 小学	計
	絵本	童話			
親指姫	6	16	10	1	33
みにくいくのい子	6	14	12	1	33
アマヒルマの少女	2	15	12	1	30
皇帝の新しい着物	4	12	11	1	28
いしのかの兵隊	2	14	11	1	28

一冊内のアンデルセン作品の数は、表4のごとく、絵本は一冊一作品が多い。しかしアンデルセン童話一作品を中心にあげ、あと数話他者の小品が記載されている形式の絵本も数点あった。幼年童話では一冊内に二〜十五位の作品が記載されているものが多い。

次に表5を参照して書名について報告する。『ひらかなアンデルセンどうわ』など作者名が書名のもので、『みにくいアヒルの子』など作品名が書名のものである。幼年期を対象とするものは、作品名を書名とするものが多く、絵本ではそれが顕著である。小学校中学年用では逆の傾向である。なお作者名が書名のもので、表8に見られるような、わが国で多く採用されているものを、三つ

四含んだものが多く、作品名が書名のもので、表8のような代表作を一例だけか、或は一〜二例と他の作品を若干含むものが多し。書名で、『みにくいあひるの子・力持ちのボール』というように、他者の作品が連名であげられているものが一冊だけあった。この傾向は他学年に比して少ない。今回の調査資料にはないが、最近『王様の童話集』『おひめさまの童話集』『どうぶつ童話集』などの書名で、アンデルセンの作品を一〜二含んだものもあり、変化にとんだ様式でアンデルセンの作品が紹介されている。いずれにせよ、書名が作者名であるものと、作品名であるものとで、内容はいくぶん異なるといえよう。

表6を参照し、再話と翻訳について数的に考察する。この分類は各図書に訳あるいは翻訳と記してあるものはそれに準じた。しかし実際には、再話にもほとんど翻訳に類すると思われるものや、翻訳にも抄訳もあった。児童を読者にする場合、再話・抄訳・翻訳などの関係は検討すべき問題と思う。前述の『翻訳文学』(河盛好蔵編)において、翻訳に関する多くの興味ある考察がなされているが、翻訳の質の検討も、児童文学の今後の課題ではなからうか。しかしいずれにせよ、絵本と幼年期の童話は、すべていわゆる再話の用語の中に含まれるといえるのでなからうか。

つきに書名が作品名のものうち、多いものから五例選んだのが表7で「皇帝の新しい着物」「雪の女王」「しっかり者の錫の兵

隊」「赤いくつ」がこれにつづいている。表の如く、書名としては「マッチウリの少女」が第一にあげられる。これは表8の内容的に多いものにも、第三にあげられている。矢崎源九郎はその訳書『アンデルセン童話集』の「解説」で「マッチウリの少女」に関して「感傷的すぎますが、わが国では、たいへんに喜ばれていますが」と述べているが、この表からもそれがいえよう。資料がまだ僅少なため、はっきりしたことはいえぬが、これに関して外国のそれと比較するのも、興味ある問題と思う。

つぎに現在わが国でもっとも多く紹介されている作品を、多いものから五例あげたのが表8で、「ナイチンゲール」「人魚姫」野の白鳥」「空飛ぶトランク」「赤いくつ」がこれにつづく。いずれも一八三五年から一八四八年まで、即ち彼の創作活動期の作品で、晩年のものはない。わが国でアンデルセンの作品は童話集から一五六、翻訳紹介されているが、今回の資料の調査からは、絵本に十八、幼年童話に五八採用され、いずれも頻度の開きは大きい。幼年童話には民話風のものを含む、前期の作品が多く、絵本では特に選択されるものが限られている。短篇小説「絵のない絵本」および童話集の追録作品<sup>注4</sup>からも、若干紹介されていた。

次に表8の如く、最も多く採用されている五作品、即ち、「親指姫」「みにくいアヒルの子」「マッチウリの少女」「皇帝の新しいう着物」「しっかき者の錫の兵隊」の再話の現状を、ストーリー

を中心にくつかの課題をあげ考察を試みる。

一、翻訳に類するものから、題だけ同じでストーリーの相当異なるものまで、その開きは著しい。

『絵本と子ども』において瀬田貞二はデイズニー絵本の批判をなし、同感するものであるが、デイズニー絵本の「みにくいあひるの子」のストーリーはほとんど異なっている。即ち、家を追われて木の巢にいるひよこと親しくしたが、それはカラスの巢でその母親に追われる。水の上に鳥が浮いているので、喜んで行って挨拶すると、木製の玩具の鳥である。ペリカンをお母さんと思ったりする。代わりに白鳥の子どもと親しくなり、お母さんにあうというストーリーであるが、作者はアンデルセンとしてある。この作をアンデルセンの「みにくいアヒルの子」と思っ、成長する子どもがいけないとは断言できないだろう。

二、比較的ながい作品は、短い作品に比して、再話者による個人差が大きい。

例えば比較のながい作品である「みにくいアヒルの子」や「親指姫」は、短い作品である「マッチウリの少女」に比して、再話者による個人差が大きいと思う。しかし「しっかき者の錫の兵隊」は長さの割に差が少なかった。例えば「みにくいアヒルの子」は

登場人物が、単複合わせて三〇種ばかり登場するのであるが、十種位しか登場しない作品も少なくなかった。

三、絵本は極度にストーリーが縮少してあるため、絵に開きが多いが、ストーリーに関しては、幼年童話に興味ある問題が見られる。

全体を縮少してあるものが多く、後半をカットしてあるものさえある。例えば親指姫がつばめの背にのり、飛びだしたところで話がおわっているものなどである。教訓を加えているものもあれば、全体をひきのばした感じのものもあるなど、他学年に比して幼年童話が最も変化にとんでいる。

四、省略は再話の中で多様な問題を持つ課題と思うが、否定的な場面を省略しがちである。

例えば「親指姫」の中で不幸な結末にいたる白い蝶を登場させず、「しっぺり者の鎧の兵隊」が最後ストープにほうりこまれるところを省略するなどである。これは読者のことを留意してと思うが、肯定、否定の両面をもつアンデルセン作品の特徴を失いがちになるといえる。さらに彼の作品の特徴として、ファンタジックな作品でも、風景描写はごく写真的であることがあげられようが、これも省略しがちであった。

五、観点が明瞭でないものがある。

「親指姫」は人間の成長過程と思うが、終りのところで花の王子に、大きくなったら結婚しましょうねといわせ、長い間苦勞しても、大人にしていけないなどである。西郷竹彦が「せむしの小馬」を例にとつて指摘している如く、大人だが身体が小さいのと、子どもで小さいのとを、考慮して区別していないものが若干あった。さらに「みにくいアヒルの子」が家を出たのは、母親にさえ見放されたことが大きな原因と思うが、あまり理由もなく、ただふらふらと家を出ていくものさえあった。再話者の意図の理解しにくいものが全体に多かったと思う。

六、加筆してあるものとしては、教訓的な意見が多い。

教訓は「皇帝の新しい着物」や「みにくいアヒルの子」などにみられた。原作訳は「王様ははだかだ」といわれながら、そのまま行列が進んでいくところでおわっている。しかし再話の中には、はだかだといった子どもに王様が感心して、御殿に呼んで、お菓子を御馳走する。あるいはベテナーをあれこそ恩人だといって責めず、それ以後おしやれをせず、仕事に精出すなど、子どもに考える余裕を残していないものもある。

以上若干の問題をあげてみたが、アンデルセンの意図したところ

ろを強調し、永続的な要素を備えた作品は少なかったと思う。

⑧ リリアン・スミスは生命力のながいキングズリヤホーソーンのギリシャ神話を例にとり、典拠の中にある精神の再創造の必要性、それには原作との親和感をもつ、環境を自分のものにするなど、根本的な問題にふれている。船木柾郎は『現代児童文学史』において、再話と創造の相違は作者の見解が素材を通じて独自に解釈されているか否かでできまると述べている。

これらの意見を考え合わせると、幼年期用として多く出版されているものも、翻訳に類するもの、抄訳、再話者が裏面に強くでているものなどを分類し、再話の限界を考察するというか、再話の価値判断の基準を考慮することが、先決問題ではないかと思う。

今回はいわゆる再話が現在どのようになされているかを、アンデルセンの作品を通して考察せんとしたが、既成の学年分類そのものにも問題があつたが、幼年期を対象とする作品に、最も多様な課題がみられたと思う。しかし、いずれもこれからこそ検討を要すると思う。

実際に幼児にあたえての反応、母親の所感なども、今後検討してみたい問題と思う。  
(大阪市立大学)

注1 浜田広介著『アンデルセン童話』の「読書指導」の欄において、桑原三郎は「単行本だけでも三百種に近いアンデルセン童話集が日本で出版されてきたのだそうですから」と述べて

いる。

注2 引用文献⑤アンデルセン童話集の中に、前述の④アンデルセン童話集も入っている。

注3 作品名は引用文献④の題名にあわせた。

注4 追録作品は引用文献④に記載されている。

#### 引用文献

- ① 柳田 泉編 明治文化資料叢書(第九卷翻訳文学編) 風間書房 一九五九年
- ② 河盛好藏編 翻訳文学(近代文学鑑賞講座21) 角川書店 一九六四年
- ③ 坪田譲治編 児童文学入門 牧 書店 一九六五年
- ④ 大畑末吉訳 アンデルセン童話全集。講談社 一九六四年
- ⑤ 菅 忠道 日本の児童文学 大月書店 一九六六年
- ⑥ 鳥越 信 日本児童文学案内 理論社 一九六三年
- ⑦ 加太こうじ編 児童文学への招待 南北社 一九六五年
- ⑧ リリアン・スミス著 岩波書店 一九六四年
- ⑨ 石井、瀬田、渡辺訳 子どもの本 実業之日本社 一九六四年
- ⑩ 西郷竹彦 子どもの本 十五少年漂流記 新潮社 一九六四年
- ⑪ ジュール・ヴェルス著 波多野完治訳 新潮社 一九六四年
- ⑫ 瀬田・中川編 絵本と子ども 福音館書店 一九六六年
- ⑬ 松居・渡辺編 子どもの本二〇選 福音館書店 一九六四年
- ⑭ 無着成恭 日本書籍出版協会 一九六五年
- ⑮ 日本書籍出版協会 日本書籍出版協会 一九六五年
- ⑯ 大畑・林・平林 アンデルセン童話集 岩波書店 一九六四～一九六五年
- ⑰ 矢崎源九郎訳 アンデルセン童話全集 講談社 一九六四～一九六五年
- ⑱ 大畑・山室編 講談社 一九六四年
- ⑲ 船木柾郎 現代児童文学史 新潮社 一九五二年